

ラ・トッカータ

シカゴ大における日本人研究者の家族

山本 常夏 〈Kavli Institute for Cosmological Physics, Univ. of Chicago
e-mail: yamamoto@kicp.uchicago.edu〉

1. はじめに

もうすぐシカゴに厳しい冬が来る。最初は1年程度住む予定だったのが、気がつくとシカゴ大に来て5回目の冬を迎えることになった。ここで私は主にthe Pierre Auger計画と呼ばれる宇宙線実験に研究員として携わってきた。この計画はノーベル賞物理学者のジム(Jim Cronin)が20年前に提案し、現在アルゼンチンの草原に検出器を展開している。私の仕事はというとデータ解析である。特にアルゼンチンから毎日送られて来る観測データの初期解析をし、その結果をテキストファイルにしてジムが解析しやすいようにしておく。それさえしておけば後は何をしていてもよく、自由に研究することができる。今年75歳になった彼はそのファイルを自分の書いた解析プログラムに読み込み、納得いくまで解析する。解析が終わると私達の部屋に結果を持ってきて、それを上機嫌で説明する。その時の彼はまるで学生のようだ。実験が進むにつれ、解析結果も面白くなってくる。今年の夏は、ジムの誕生日パーティーを兼ね、今までの観測結果をもとに1ヶ月に及ぶワークショップが行われた。一昨年奥さんに先立たれた彼はそこで婚約者を紹介していた。この冬にアルゼンチンに新婚旅行に行くそうだ。まだまだ元気である。このワークショップではまず検出器、モデル計算、シミュレーション、データ解析等宇宙線に関する各分野のエキスパートたちを呼び寄せ、最新の観測結果をもとに将来計画の提案書を作成した。さらに結果の公表に向け解析方法の議論が行われた。この間約200人の科学者がシカゴ大に出入りし、このワークショップに参加した。シカゴにいるとさまざまな国籍の人達と仕事をすることになり、研究する上で常に最新の情報に触れ、刺激とアイデアには事欠かない。

シカゴ大で研究をしていて出会うのはさまざまな国籍の研究者だけではない。ここには物理以外の分野で活躍し

ている日本人研究者がたくさんいる。医学、生物、化学、ビジネス、法律、言語学、心理学、歴史、考古学、音楽など日本にいたらあまり触れる機会のない分野で働いている人たちと付き合うことができる。彼らもまた最新の情報と刺激を求め、シカゴ大に滞在している。彼らとは日本人同士頻繁に会い情報を交換する。研究や論文の進み具合、研究室のボスや同僚との人間関係等、分野によらず共通の悩みがある。共通の悩みは仕事関係以外にも多くある。特に重要なのが家族に関する問題である。海外での研究生活の成功は家族にかかっているといつても過言ではない。子供の教育、病院から安全の確保まで生活する上で避けて通れない問題は山ほどある。

家族にしてみれば突然アメリカに連れてこられ、そこで生活しなければならないのだからたまたまものではない。概して研究者の家族は大変である。話は理屈っぽく常識があまり通じない。しかも生活が不規則で学会やら国際会議やらと出張も多い。さらに大して給料が高いわけでもないのに実験やら解析やらと夜遅くまで働くことになる。そのうえ海外で研究するとなると、知り合いもいなければ言葉も通じないとここで生活しなければならないのである。就労ビザがないために働くこともできない。ここまで来るとかえって諦めがつく。そこで同じ境遇にある日本人研究者の家族たちとの付き合いが大事になる。

2. シカゴでの生活

毎年、春から夏にかけて日本から新しい研究者家族がシカゴへやって来る。最初の数ヵ月は新しい生活のセットアップのため慌ただしく毎日が過ぎていく。安全な生活環境を確保し、保険や年金、車の購入、銀行口座等の手続きをすませ、子供の学校や病院を決めなくてはいけない。9月に子供たちの学校も始まりほっと一息つく頃シカゴの

空は曇りがちになる。それまでの夏の日差しが嘘のように雨が降り続き、季節が急激に変わっていく。毎日曇った空やミシガン湖から吹き付ける風に飛ばされる落葉を見ているとしだいに心も沈んでいき、目新しかったアメリカ生活も不安が目に付くようになっていく。シカゴ大があるハイドパークという街はダウンタウンから車で20分程離れていてミシガン湖沿いの静かな大学街といった感じである。ここには小さなショッピングセンターがあるだけで新鮮な食材を確保するためには週末に家族総出で大型スーパーや日本食品店へ行くことになる。近年ここイリノイ州では就労ビザがないと運転免許をとることが非常に困難になった。そのためどこかに出かけようと思うと研究者に頼らざるをえない。「行きたい所に自分で行けない」というのはかなりのストレスになる。渡米して半年ぐらいは研究者のほうも自分の研究にかかりっきりでなかなか家族と過ごす時間を作ることもできない。それで便利だった日本での生活を思い出しながら日常生活にストレスを感じ、寒い空を見ながら帰りの遅い研究者を待つことになる。こういう時ありがたいのが同じ様な境遇にある研究者の家族たちの存在である。冬の間気温が-10度以下になり外へ出られなくなると誰かの家に集まって、日々の生活のこと、子供の学校のことなどを話しながら午後のひと時を過ごす。日本食が手に入る店、アメリカの食材を使った料理の方法、アメリカ生活について詳しく書いているホームページ等の情報交換が行われる。そしてその時の一番の話題は「いつ日本に帰れるか」だ。医学系の研究者の場合、2~3年の間に研究を終え帰国することが多い。そのくらいになると日本の医局から声がかかるらしい。ロースクールは1年、ビジネススクールは2年と決まっている。日本へ帰る時期が決まっている場合はいいが、大抵の場合は流動的である。そのため研究者の家族同士「うちは3月に帰国が決まりそうだ」「うちはあと1年延びた」などと、いつになったら日本に帰れるのか見通しのつかない未来を考えることになる。これには子供の教育もからん

でくるので決して簡単な問題ではない。ハイドパークで学校を選ぶ際、選択肢としては公立の学校もしくはシカゴ大付属のいずれかになる。シカゴ大附属はここハイドパークだけではなく、シカゴ周辺で最も人気のある学校の一つである。もちろん授業料もかなり高額だ。そして、子どもがある程度の年齢になってくると考えなければならないのが「日本語教育」である。シカゴの場合、日本人学校はハイドパークからは離れた郊外にあるため、週末の補習校に連れて行くことになる。毎週末補習校へ通わせることはかなりの時間と労力を費やすことになり容易ではない。英語か日本語のどちらを優先させるかは、帰国時期によって大きく左右される問題なので、学校選びにも大きな影響を及ぼす。

3. アメリカ生活で思うこと

アメリカに来てつくづく感じたことは、教育・医療・安全というのはお金で買うものであるということだ。質の高いサービスを受けるためには、それなりのお金を出さなければならない。今年の春、我が家が第二子がシカゴ大病院で誕生したのだが、妊婦検診の費用から出産・入院費用まで健康保険で全額カバーされた（健康保険料も大学がかなりの部分を負担してくれるので我々が実際に支払う金額はわずかである）。これはとても有難いことである。というのも、出産に関する費用は半端ではないからだ。我が家の場合、全額保険でカバーされていたとはいえるが、毎回送られてくる請求書を見ると目玉が飛び出そうな金額が並んでいる。

シカゴでの生活も一年経てば一通り

の行事も体験し、日本の生活もすっかり頭から抜けアメリカでの生活も悪くはないと思い始める。長くて寒い冬が終わるとハイドパークは新緑に覆われとても美しい街並みに変わる。夏になるとあちこちで無料コンサートやイベントが行われる。夏の夜の野外コンサートはとても気持ちが良い。芝生にピクニックシートを敷きワインを飲みながらクラシック音楽に耳を傾ける。日本ではなかなか経験できないことだ。秋になればハロウィンやサンクスギビング、そして12月には町全体がクリスマスのデコレーションに包まれてとても華やいだ雰囲気になる。手に入りにくいものは自分たちで作るようになる。和菓子も日本のパンも作る。

また、アメリカは子供連れに対してとても理解がある。子供とバスに乗ろうとすれば近くにいる人が手伝ってくれるし席も譲ってくれる。美術館や博物館では年間パスが普及していて、子供向けのイベントも充実している。冬は外で遊べない分博物館の存在は大きい。動物園も日本とはくらべものにならないくらい広い。大抵のレストランには子供向けのメニューがあり、待っている間も退屈しないようにちょっとしたおもちゃや塗り絵をくれる。ただ最初は美味しく感じたステーキもこのころには少し飽きて近くに居酒屋が欲しくなる。これだけはどうしようもなくダウンタウンにある寿司屋に足を運ぶことになる。しかし、ここはアメリカ。色々な国の人々が住み、リトルタウンを作っている。チャイナタウンではおいしい飲茶を堪能でき、韓国焼肉、スペインのタパス料理、ポーランド、ギリシャ、中近東、南米料理、各国の

料理を味わうこともできる。

最近はインターネットの普及もあって、アメリカにいても日本の情報はオンラインで入ってくるし、日本のTVだって見ることができる。しかし、いざ日本に一時帰国しようと思うとビザの問題があるし、家族全員で帰国となると結構な金額になるのでそう頻繁には帰れない。そうなると心配なのが日本にいる両親である。病気になった、入院したと聞くと距離が離れている分余計に心配になる。日本にいればすぐに親の顔を見に行けるが、海外にいるとそうもいかない。電話だけではよく事情も理解できず不安は募る。

4. 妻のぼやき

日本を離れてアメリカで暮らしてみて初めて日本のよさが分かったり客観的に日本を見る事ができた。また何事に対しても自分達の力で乗り切ろうと努力したり、海外で暮らしてこそ経験できたことがあった。最初の一年を乗り切れば、後は何とかなるもので、それが自信につながっていく。

この原稿を書いている私の隣では、妻が「アメリカに来た当時は、まさかここで出産するなんて思いもしなかったけど、日々上達していく子どもの英語を聞き、いろんな国から来た人たちとビールを飲んで帰ってくるあなたを見ていると、いつ終わるとも分からぬいアメリカ生活ではあるけれど、こういう生活もなかなか経験できない貴重なものかもしれない」と話しながら、日本のドラマを見ている。

(2006年11月10日原稿受付)